

長尾伴七宛谷崎潤一郎・松子書簡紹介

細江 光

長尾伴七氏は、昭和二十八年一月以降、谷崎松子夫人の漢文の師となり、長く谷崎家の人々と交流のあった方である。

長尾氏に宛てた谷崎潤一郎および松子の書簡の多くは、既に長尾氏の御著書『京の谷崎』に紹介されているが、割愛されたものもあるので、長尾氏および谷崎家の御了解を得て、ここに紹介させて頂く事になった。

なお、『京の谷崎』所収の手紙は、例えば
(S28/9/25松子書簡↓長尾伴七『京の谷崎』)
のような形で、しかるべき個所に表示して置いた。

また、注を付すに際しては、観世恵美子・長尾伴七両氏の御協力を得た。中でも漢詩文への注は、すべて

長尾氏の御教示に拠ったものである事を御断りして置く。

長尾伴七氏と谷崎家に対しまして、この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

* * *

(S28/9/25松子書簡↓長尾伴七『京の谷崎』)

(S29/1/1潤一郎・松子書簡↓長尾伴七『京の谷崎』)

(S29/9/1松子書簡↓長尾伴七『京の谷崎』)

①昭和二十九年十二月十日付け松子書簡

〔熱海市伊豆山鳴沢一―三五より 京都市右京区花園馬代町三 京都府立山城高等学校内 長尾伴七先生

御人々)

晩秋の京の美しくしさに心惹かれて立ち兼ねて居りました
 たがとう／＼熱海へ来てしまひました 箱根の雪でと
 たんに冬が訪れました 京もそろ／＼比叡も白くなる
 ころでございませう 在洛中は御懇切のかぎりに御教
 授下さいまして本当に忝くおろそかに思つて居りませ
 ん 全く感謝の言葉もございませぬ 其の後御機嫌お
 麗しく学期末の事とて何かと御繁忙の御こと、拝察致
 します折柄御細々と御かき頂き寔に恐れ入りました
 その上御町重な御状まで賜はり嬉しく存じました 疲
 労気味の私の軀のことまで御案じ下さいまして御慈し
 み溢れる御言葉に涙ぐまれました たゞ今のところ訪
 客も少く久々に閑な時を楽しむことが出来御好意によ
 ります孟浩然の詩も御蔭様でくりかへしよく味ふ事が
 叶ひ深く喜んで居ります どうか又御守暇もお有りの
 節には宜敷御教導の程願ひ上げます 来春には一度熱
 海へも御来遊被下度希ひ待つて居ります向寒のみぎり
 御身御自愛願ひ上げます 末ながら御奥様御母君にお
 よろしく御鳳声被下ませ

こなた主人、娘、妹よりも山々よろしく申出ました

かしこ

長尾伴七先生

御前に

②昭和二十九年十二月十八日付け松子書簡

〔熱海市伊豆山鳴沢一―二三五より 京都市右京区花園
 馬代町三 京都府立山城高等学校内 長尾伴七先生

御侍史〕

晴れた空も海も瑠璃いろに冴えて伊豆のうみは美しく
 一度御ゆるりお眺め頂きたくと思はれます わけて
 御事多い中を又御綿密におかき入れの上お送り下さい
 まして本當に恐れ入りました きつと御時間を多くお
 とりしてゐること、心すまなく存じます 御蔭様で机
 上において幾度でも拝見出来ますのでよく頭に這入り
 ます ありがたく存じて居ります 主人も押しつまつ
 てから放送対談等引受けましていそがしくすごして居
 ります NHKもラヂオ東京もございませぬから又どう

か御き、下さいませ よろこびますこととせう 新年
号中央公論は御らん下さいましたでせうか？

いづれ後便にて申し上げますがとりあへず御礼まで
御多忙におつかれ遊ばしませぬ様ねがひ上げます

かしこ

長尾伴七先生

松子

尊前

【注】

(1) 福田清人が訪問し、『十五人の作家との対話』所収の対
談をしたのが十二月十日。ラジオ東京の「新春座談会」

(谷崎潤一郎・志賀直哉・吉井勇・司会 辰野隆) が、
十二月二十六日録音(同日付けラジオ東京編成局大森
直道宛志賀直哉書簡)、一月一日放送。この他、「京都
新聞」昭和三十年一月一日号に熱海での十返肇との対
談「新春放談」が掲載され、三十年一月三日には、N
HKラジオ第一放送で、「新春座談会」(谷崎潤一郎・
吉井勇・後藤末雄) が放送されている。

(2) 「中央公論」新年号には、グラビアに潤一郎の写真が掲
載され、また、この号に掲載された潤一郎の随筆「老
いのくりごと」の中に、潤一郎が長尾伴七氏に質問し

ていた郭沫若の「海濤」や欧陽予倩の詩のこと(『京の
谷崎』P83、86)が出て来るからである。なお、
新年号は、十二月十日頃から発売されたと推定され
る。

③昭和三十年一月二十四日付け松子書簡(速達)

〔熱海市伊豆山鳴沢一―三五より 京都市右京区花園
馬代町三 山城高校内 長尾伴七先生 御直〕

お揃ひ御機嫌美しく佳き年をお迎へ遊ばされ先づは
めでたくおそまきながらお慶び申上ます昨年中はなみ
くならぬ御ねもころの御教導に預かり忝く深く心に
銘じて居ります 何卒本年もよろしく御みちびきのほ
どひたすらお願い申し上げます 初春からも度々御心
の籠つた御状に細々とお書き頂きましたの御教示の
数々単に有難く存じます 勉学のこと、は申しながら
興も失せぬ様とどんなにか御心をお砕き頂いて居りま
す事かと身にしみてよく感じられます こゝに厚く御
礼申上ます その都度々に御礼申上べきところつひ
家事に取り紛れる事多く心に任せず失礼を重ねて居り

ますが御容赦願ひ上げます 自分の時間が得られます
時は出来るだけ認めたく存じて居ります しかしお送
り頂いて居りますものは眠る時間を割いても繰りかへ
し拝誦致して居ります 昨日あたりまで御年始の来客
受けることに追はれて居りました それに十七日は山
火事(注)で一時は大事に至るかとおやぶまれ荷物まで纏め
主人は近くのホテルに避難致しましたりで大さわぎを
致しました あとの始末が又大変で駆けつけて下さつ
た多数の方々への御礼廻りに私は疲れてしまひました
今年(注)は京は雪も多く寒気殊に厳しき由くれぐれも先
生はじめ皆さま御いとひ遊ばして下さいませ 御多祥
祈り上げます

かしこ

松子

長尾伴七先生

尊前

【注】

潤一郎の娘の恵美子さんによれば、夜の事で、伊豆
山の興垂観音の直ぐ上まで火が近付いて来たので、潤
一郎は富士屋ホテルに避難した。出入りの植木屋など
が駆け付けてくれたと言つ。

④昭和三十年二月一日付け松子書簡(現金書留)

(熱海市伊豆山鳴沢一二三五より 京都市右京区花園
馬代町三 山城高校内 長尾伴七先生)

いれちがひに御状ならびに御教示の書を拝受致しまし
た 何時もながら御懇篤の御思召に感謝を深めながら
拝読致して居ります 京は雪のちらつく日も多く定め
しこ、もと厳しいさなかとぞんじます 何卒御身御い
たわり遊ばして下さいませ 京に比べてこちらはもう
春のお暖かさで風情こそございませんが寒さくらはも
いて居ります 梅園のうめも早や散りはじめました
この県下は殊にお馴染み深き地ゆゑ其(注)のうち御来遊の
こともあればと御噂等申し上げて居ります
寔に失礼ながら月謝をお送り申し上げます 何卒御納
め願ひ上げます 末乍ら奥様へよろしく御鳳声下さい
ませ

かしこ

松子

長尾伴七先生

御前に

【注】 長尾伴七氏は、静岡県浜松出身だからかく言う。

⑤昭和三十年二月四日付け松子書簡（葉書）

〔熱海市伊豆山鳴沢 一一三五より 京都市右京区花園

馬代町 山城高校内 長尾伴七先生〕

はや立春曆の上とは申しながら草木にもあきらかに春のさざしがみられます 相ついで精細の解説をお送り下されありがたく存じます 心遣のみ多い日常の何よりの精神の糧となつて居ります 感謝の他ございませぬ 当地名産干物お目に懸けます あがりのいい時をお送りするやうたのみました 主人が先日の漢詩の誤り（注）をお報せ願ひたくと申して居ります 先にお書き頂いたものを京都において参りましたので お寒さも今暫しくれぐれお大切に

【注】 前出『老いのくりごと』の中に引用された欧陽予倩

の詩の、結句の読み方のこと。『老いのくりごと』では、「喚起釵鸞（注）壓（注）鬢低」と訓点が施されているが、

長尾伴七氏が豹軒鈴木虎雄氏から教示を得た所では、「喚起す釵鸞の鬢を（注）壓して低るるを」で、「軒のインコ

がふとホトトギスの鳴音を真似て）かんざしを挿して眠っている美人を呼び起こした」の意ということだった。

⑥昭和三十年二月二十二日付け松子書簡

〔熱海市伊豆山鳴沢 一一三五より 京都市右京区花園

馬代町三 山城高等学校内 長尾伴七先生 御侍史〕

冴えかへるおさむさにお障りもいらつしやいませんか

昨日は熱海でも珍らしく空気が冷たうございました

この分なれば京都は雪がちらついてゐることですと申し合ひました 此の程は早速御返書を恐れ入りました 主人よりよろしく御礼申し上げる様と申しつかりながらこのとろ娘の縁談の事等で何となく心落つかず又もや失礼申上てしまひました どうかお赦し下さいませ 今回も王維の詩に就て御懇篤な御教示に預かり寔に愉しく拝読致しました おさむげの和む日は帰洛の日が近づいたかと何となくほのくとした気持ちになります 陽春の訪れが待たれます 当地に何かお思ひ出しになるやうな召上り物でもおありになればど

うか御報せ下さいませ お送り申上ます 大体県下の名産は似たやうなものと存じます 感冒流行の折柄くれぐれもお厭ひ遊ばして下さいませ 末乍ら御家族の皆様方へよしなにお伝へ願ひあげます 乱筆御判じ下さいませ

かしこ

松子

長尾伴七先生

御前に

⑦昭和三十年二月二十八日付け松子書簡(絵葉書・熱海の夜景)

〔熱海市伊豆山鳴沢一―三五より 京都市右京区花園

馬代町 山城高校内 長尾伴七先生〕

又どうやら東海道はどこかでお手紙がいれ違ひました

御機嫌にお渡りの事と存じます 一年中で一番のお

忙がしい時でいらつしやるのでございませうね 左様

な折まで本当に恐れ入ります この前あたりからはま

でより興味が湧いて参りました 御導きの賜物とぞん

じます 少し御手すきになつてからで結構でございませから又よろしく願ひ上げます 御体お厭ひ遊ばしませ

(S30/3/18松子書簡↓長尾伴七『京の谷崎』)

⑧昭和三十年四月七日付け松子書簡(速達)

〔熱海市伊豆山鳴沢一―三五より 京都市右京区花園

馬代町三 山城高等学校内 長尾伴七先生 御侍史〕

花たよりの切抜きまでお添え頂いての御状並びに引き

続きましての王昌齡の御解説ありがたく落掌致しまし

た 洛中洛外の花のたよりをどんなに知りたがつてゐ

るかゞ通ひましたかおやさしい御心遣ひにはのぐと

してくるやうな悦びを感じました 嬉しく厚く御礼申

上ます

それでは平安神宮も明日あたり見頃なのでございませ

う 本年は花におかれての帰洛になりさうで本当に氣

が揉めることとございませ 当地はけふからはな吹雪

が美しく青い海面を背景にはなびらの舞ひ上るのも

興がございませうが同じさくらでも京のやうに風情がないと主人が申します

先日はこゝからは手の届きさうなところへ御出でございましてのお立ち寄り頂けず寔に残懐このことにぞんじました

沼津からは四五十分のところ皆さままでお訪ね下さいませればよろしうございました⁽¹⁾ どうか其の様なをりがございましてこれからは御遠慮なく御越し下さいませすやうお願い申します 私共も十五日頃には帰洛の予定でございませう 御拝顔も近づきました 久方ぶりの御目もじを楽しみにかへります

都踊も今年は源氏物語からでせひ御母君御奥様とお揃ひにて御覧遊ばして頂きたくございませうかへり次第切符を御おくり申上げます 今一度東京へ治療をうけに参りましてから帰ることになるのでございませうが私も東京行で疲れまして申訳なくは存じながら拝受の御報告を怠る事もたび／＼でございませうがどうか御容赦願ひ上げます 漢詩の方はよく味はつて拝読させて頂いて居りますがお受けの方がつひおろそかになつてしま

ひます 夜も深更になりました故これにて御やすみ遊ばしませ

御身御自愛願ひます

かしこ

長尾伴七先生

松子

御前に

【注】

(1) 三月二十七日から二十八日にかけて、長尾伴七氏が同僚七人と共に静岡県内を旅行し、土肥の伊豆海館から松子に葉書を出して、谷崎邸に立ち寄らずに京都に帰る、と書き送った事に対する言及。

(2) 昭和三十年四月一日から五月十五日までの第八十二回都踊り『舞扇源氏物語』で、潤一郎が監修者となっている。

(3) 潤一郎のめまいを直すための鍼の治療。『京の谷崎』P 117以下に詳しい。

⑨昭和三十年四月二十一日付け松子書簡(速達)

(左京区下鴨泉川町五より 市内右京区花園馬代町三

山城高校内 長尾伴七先生」

帰洛早々に何時もながらの御健筆に接し洵に心慰む思
でございました。深く謝し上げます。こゝもとうすら
さむく少々閉口致して居りますが谷崎も大層元気で駅
へ迎へて下さった方が別人の感があるとさへ云はれま
した。日々顔をつき合せて居りますとさまで分りませ
んがさう云はれてみますと今更によくこゝまでにと感
無量でございます。

滞洛中も亦お書き下さいましてお教示給はります御意
向拝承致しました。先生の御性格そのまゝに御篤実な
御懇切をきはめた御指導にたゞ／＼頭が下る許りでご
ざいますがお骨の折れる事をまだ続けて頂いていゝの
かしらと思ひまどひますけれど若し御気の向かれます
時だけでもおかき頂ける様でございましたら引きつゝ
き愉しくお待ち申上て居ります。そして月に一回位の
御拝顔得られますなれば寔に嬉しく存じます。

都踊の御観覧券同封申上ます。お揃ひにて春宵のひ
と、き繰りひろげられます源氏絵巻を御らん遊ばして
下さいませ。印象に残るほどのものはございませんが

みてゐる間は美しくうございませぬ。不順の折柄くれ
／＼も御いとひ遊ばされますやう

かしこ

長尾伴七先生

松子

御前に

⑩昭和三十年六月二日付け松子書簡（速達）

〔左京区下鴨泉川町五より 市内右京区花園馬代町

山城高校内 長尾伴七先生 御人々〕

入梅も近づいて参りました。入らぬ前から気のふさぐ
やうな天候が続いて居ります。御家族の御皆様御機嫌
いかゞにいらつしやいますか。先生にも御多用中を何
時／＼／詳解を極めてお教へ頂きこんなに御労力や御
時間を頂いてと全く忝いやら濟まない気持で一つぱい
でございます。

さてまた主より先生に御うかゞひのことがございまし
て私よりお願ひするやうとので寔に恐れ入ります
が御教示給はりたく存じます。辞引が全部熱海にごぞ

いまして調べることが出来ないかと申して居ります

この程

見笑大方

と篆刻の印を求め様と致しましたが意

味が判り分らないと駄だからと申しまして御教を乞ふ

次第でございます⁽¹⁾ 主は左の莊子秋水の河伯自言、嘗

見笑於大方之家、とみて居りますが意味の解釈を

御願ひ申上ます 間違つた個所がございましたら私の

聞き間違ひでございますから何卒御判じ下さいませ

佐佐木信綱先生御入洛等⁽²⁾でこゝもと忙はしく失礼申上

ました 熱海へ中旬参ります それまでに一度御越し

頂きたく御拝顔楽しみに致して居ります御健康に御気

おつけ遊ばして下さいませ 谷崎よりも山々よろしく

申出ました 御家族の皆様によりしく御伝声願ひ上げ

ます

かしこ

松子

長尾先生

御前に

【注】

(1) 『京の谷崎』P127以下に詳しい。

(2) 潤一郎は、戦後、佐佐木信綱の住む熱海に別荘を構えるようになった昭和二十五年頃から、時折教えを乞うようになり、二十七年頃からは、松子が和歌の手ほどきをして貰うようになっていた(『武林無想庵盲目日記』昭和二十七年二月九日)。

佐佐木信綱が下鴨の潺湲亭を訪れたのは、信綱の「九日の旅」(心の花)S30/8)によれば、五月二十六日のことで、高折夫人も同席した。松子の「倚松庵の夢」「銀の盞」によれば、この時、信綱は「五月のけふこのよき林泉のこの青葉君の言の葉に匂を添へん」の一首を谷崎に贈った。「九日の旅」によれば、三十一日には、嵐山の堰川で行われた古代裂流しの供養の際、松子と城戸崎夫人が佐佐木信綱一行と船を並べ、六月一日には、帰途に就く佐佐木信綱一行を、京都駅で、谷崎潤一郎・松子・新村博士・富岡とし子・藤田富子・鈴鹿三七らが見送った、とある。

⑪昭和三十年七月二日付け松子書簡(速達)

(熱海市伊豆山鳴沢一三三より 京都市右京区花園

馬代町三 山城高校内 長尾伴七先生 御侍史)

俄に真夏のお暑さになつて参りました わけても京の

蒸し暑さ烈しい頃と存じます 何時も御壮健に御精勵の御様子にて何より嬉しく存じ上げます

滞洛中には思はぬ失礼を申上て了ひました

度々御拝顔を得られます事と楽しみに致して居りましたのに予期に反してあはたゞしい御目もじに了りました

次々訪客お電話に席のあたゝまる暇もなく全く忙殺されて居りました

熱海へ立つて参りますまでには是非御目に懸りたく谷崎も少し御訊ね申上たい事もある様で前日まで時間を繰り合せましたがどうにもならない程ぎつしりと話つて居りました 残念この上なく存じましたが秋にまたといふことに諦めて参りました

それに主人が何か書道全集に載つてゐる書家のお軸(注)をもらつて頂きたくとお手渡し申上るとしきりに申して

居りましたがそれもそのまゝになりました 大したも

ではございませんが主人所蔵のものでございます いづれ御目に懸ける事でございませう 何時も〴〵御精魂を傾けてお書き頂きもう御礼の言葉も見付かりま

せん 片句もおろそかには拝見出来ぬと固く心にいましめて居りますが一々御札申上ないで定めしお憫れでいらつしやいませうが何卒御宥し願ひ上げます 京都

では多用に取り紛れて自分を失つたやうでござい

ましたが熱海へ来て少し落付くと疲労甚しい自身を取り戻し驚きました このところぶら〴〵致して居りました 幸いに今のところ来訪の方も少なくて休養が出来さうでございます

心にかゝり続けて居りましたから朝風の涼しいうちにと机に向ひました 京よりは空気は爽やかで主人もこちらへ参りましたから好調で家中で一番元氣なので一回気分が明るうございます 又後便にて申上ますがお暑さに御家族の御皆様くれ〴〵も御躰おいとひ遊ばして下さいませ谷崎よりも宜敷申出しました

かしこ

松子

長尾伴七先生

御前に

【注】 鄭孝膏の軸「遥知魯国真男子家有世南行秘書 丙子
 新秋孝膏」のこと。後出九月四日付け松子書簡に出て
 来る。九月九日に贈った。

⑫昭和三十年七月七日付け松子書簡（速達）

〔熱海市伊豆山鳴沢一―三五より 京都市右京区花園
 馬代町三 山城高等学校内 長尾伴七先生 御硯北〕

此のところ毎日強風ふき捲りざはくど何となく静心
 なく過して居ります

京も祇園祭も近づき定めし凌ぎ難い明け暮れと存じ上
 げますが何卒御機嫌よくいらつしやいます様念じて居
 ります お暑さの中を甚だ恐縮に存じますすが谷崎が左
 記の事を御調べ願ひたく手許に御本がないものでござ
 いますからと申して居ります

朱子の詩でございます

○印のところ記憶が判りしないさうでございます

未醒池塘芳草夢

階前梧葉已秋声（注）

已ニはこの字でございますましたでせうか 既ニ ござ
 いますせうか

それが伺ひたいさうで次に王陽明ノ詩で

波静海濤三万里

月明振錫下天風（注）

波静かどうかあやしいさうでございます

七言絶句で最後の句が

江北江南無限情

この詩をお書き頂きたくいづれも他に間違つたところ
 がございますたら御教示に預りたく御願ひ申して居り
 ます 記憶があやしいさうでございますから

せき立てられましたので凄い乱筆になりましたが御判
 じ願ひ上げます

かしこ

松子

長尾伴七先生

御硯北

【注】 朱子の詩「偶成」の一節。次は王陽明の詩「泛海」
 と「龍潭夜坐」。何れも『幼少時代』のための質問であ
 る。谷崎は、昭和三十年四月から、「文芸春秋」に「幼
 少時代」の連載を始めていた。王陽明の詩「泛海」

は、「文芸春秋」昭和三十一年一月号『幼少時代』(十)の「稲葉清吉先生」に、朱子の詩「偶成」は昭和三十一年二月号『幼少時代』(十一)の「稲葉清吉先生(つゞき)」に用いられた。

長尾伴七先生

かしこ
松子

御前に

⑬昭和三十年七月二十三日付け松子書簡(速達)

〔熱海市伊豆山鳴沢一一三五より 京都市右京区花園馬代町 山城高等学校内 長尾伴七先生 御人々〕

⑭昭和三十年八月二日付け松子書簡(葉書)

〔熱海市伊豆山鳴沢一一三五より 京都市右京区花園馬代町三 山城高等学校内 長尾伴七先生〕

綺羅びやかな祇園会もすぎ京の街は常にもましての静けさにかへつた事でございませう 今年は炎暑は又格別日々如何御消光遊ばされますかお伺ひ申上ます 谷崎より御訊ねの事に就きましてはお暑さのさなかを種々参考書等お漁り頂き洵に有難うございました 厚く御礼申上る様申出て居ります 錫の字は私のうつし違ひでございました 御解説もいつもながらに御心を傾けておかき頂き拝読の度毎に新たに感謝の念が起ります 厚く御礼申上ます 先日よりこちらへ京都から孫も参り日々賑やかでございます 酷暑の折柄御家族の御皆様特に御躰御気おつけ遊ばしませ 後便にて又申上ます

⑮昭和三十年八月十二日付け谷崎潤一郎書簡
封筒「表」

京都市右京区花園馬代町

三京都府立山城高等学校

長尾伴七様

切手 十円 1枚

消印 熱海 30. 8. 12 後0-6

〔裏〕

× 八月十二日

熱海市伊豆山鳴沢 (以下ゴム印)

電話熱海二九七〇

谷崎潤一郎

〔用筆・用紙など〕毛筆・滯濼亭用箋2枚

〔本文〕

拝啓

度々家人を介し御高教にあつかり誠

に難有厚く御礼申上ます江北江南

無限情¹⁾はたしかにあの七言律詩にちが

ひ無之臨流欲写猗蘭意と云ふ句が上に

ありましたことを御指示によつて思ひ出しまし

た昔学校の先生に王陽明全集 (日本で翻

刻した五号活字の活版本) について教へて貰つた

ことがありましたが明詩別裁²⁾に載つてゐたとは

存じませんでした

御引用になりました「辞海」³⁾と云ふ字典を私も

一部座右に備へたいと存じますがお世話願へれ

ば幸甚であります尚又佩文韻府⁴⁾を縮版

活版にしたものを昔売つてをりましたが今で

も手に入れることが出来ませうか七十の手

習にて近頃又漢文の必要に迫られることが多

く困つてをります今後共何分宜敷お願ひ

申上げます

今史記本紀呂后の戚夫人のところを少々調

べてをりますが「人薨」の薨は「冢也」とあります⁵⁾

(以上一枚目)

が何かもつと「薨」の字につき詳しい説明が得ら

れましたらと思ひますこれも御高教を仰ぐこ

とを得ば幸甚であります

以上御礼旁々重ねてお願ひまで

八月十二日

長尾先生

谷崎潤一郎

榻下

昔あ、云ふことを調べるのに図書館で淵鑑類函と云ふ本を見たことがありましたが今あの本は中国で石印に付して縮刷本出てゐるやうで

す、あのやうなものが安く簡単に手に入るとよいと思ひます

【注】

(1) 「臨流欲写猗蘭意江北江南無限情」は王陽明の詩「龍潭夜坐」の末尾。その大意は、《昔孔子が山中に香る蘭を見て琴曲「猗蘭操」を作り、道行われず時に逢わざるを歎じたというが、清流に臨んで自分もそれと同じ心境を写したいと思う。思えば江北にも江南にも反乱相次いで正道行われず無限の思いを禁ずる事が出来ないではないか》。

(2) 『明詩別裁集』全十二卷。清の沈德潜が、明の陳子龍らの『明詩選』、清の錢謙益の『列朝詩集』、朱彝尊の『明詩綜』などから、選び集めた作者三百十四人の詩一

千余首を載せる。

(3) 舒新城らの編。一九三七年初版。中華書局刊。近世小説や詞曲の語彙をかなり取り入れ、出典を明記してある点が優れている。

(4) 清の康熙帝の勅撰。一七一一年成立。韻で配列した百科全書。

(5) 戚夫人のことは、『源氏物語』の「賢木」にも登場しており、『過酸化マンガンの夢』に用いられた。昭和三十年八月二十五日付け嶋中鵬二宛速達536に「来月初旬から七十年記念号（昭和三十年十一月号）の原稿（『過酸化マンガンの夢』）にかかり、二十四五日頃までに脱稿のつもり」とある。

(6) 清の康熙帝の勅撰。一七一〇年成立。なお、佐藤春夫の『あのころの私と交友』（『文芸朝日』S37/12）によれば、大正七年『李太白』執筆の際、春夫は作中で用いる酒の名や星の名などを知るために、潤一郎に教えられて、上野の図書館に『淵鑑類函』を調べに行つたと言ふ。

①⑥ 昭和三十年八月十八日付け谷崎潤一郎書簡封筒「表」

京都市右京区花園馬代町

三府立山城高等学校

長尾伴七様

切手 十円1枚

消印 熱海 30. 8. 18 後0-6

〔裏〕

メ 十八日

熱海市伊豆山鳴沢一一三五(以下ゴム印)

番地 電話熱海二九七〇番

谷崎潤一郎

〔用筆・用紙など〕毛筆・滌溪亭用箋1枚

※この書簡は、『京の谷崎』P207に写真版で掲載されている。

〔本文〕

拝啓

御多忙中早速詳細なる御高教に与り

御芳志まことに忝く厚く御礼申上候

あれだけ御しらべ戴きましたら十分に御

座候に付此以上は御放念被下度候

猶又彙文堂へお手配被下辞海いち早

く入手することを得大いに助かり申候

これ又厚く御礼申上候

残暑なか／＼に敵敷候折柄御地方は

一層の御事と拝察いたし候切に

御自愛祈上候猶々今後共御高教

を仰くこと可有之何分宜敷願上候

八月十八日

谷崎潤一郎

長尾先生

侍曹

〔注〕主に中国関係の書物を扱う古書店。京都市上京区丸

太町通り寺町東入ルにあった。京都大学文学部の「中国文学報」の発行元でもあった。

国文学報」の発行元でもあった。

⑰昭和三十年八月二十三日付け谷崎潤一郎書簡

封筒「表」

京都市右京区花園馬代

町三府立山城高等学校

長尾伴七様

切手 十円 1枚

消印 熱海 30. 8. 23 ? 0—6

〔裏〕

メ 八月廿三日

熱海市伊豆山鳴沢 (以下ゴム印)

電話熱海二九七〇

谷崎潤一郎

〔用筆・用紙など〕毛筆・滬溪亭用箋1枚

〔本文〕

拝復

十九日附御芳書拝見仕候御多忙

中重ねて詳細なる御高教に

あつかり御厚情まことに難有

深謝仕候先は取あへず御礼

まで如斯御座候

八月廿三日

谷崎潤一郎

長尾先生

侍史

⑱昭和三十年九月二日付け松子書簡

〔熱海市伊豆山鳴沢一一三五より 京都市右京区花園

馬代町 山城高等学校内 長尾伴七先生 御侍史〕

ふり続く雨に海も岬もかき消されて居りましたが今朝は晴れ渡りすつかり初秋の爽涼さに変りました

本年の猛暑に御家族の御皆様さしたるお障りもなくおおくりになりました本当に何よりの喜びでございました

た 御慈しみも深く御案じ頂いて居りました私の躰の不調もお暑さの去りますとともに恢復致して参りました

何時も心温まる御状まで添へられまして御解説を有難く存じます

李白は殊に興深うございます

主が鄭孝胥の書をお贈り申上るさうで本日発送申上ます 何卒御納め遊ばしませ 御氣にいればどんなにか

よろこびますこととせう 時候の変り目故御身御大切に願ひます 谷崎よりもよろしく申出ました かしこ

長尾伴七先生

松子

御前に

①9 昭和三十年十一月八日付け松子書簡

〔熱海市伊豆山鳴沢一三三五より 京都市右京区花園
馬代町 山城高等学校内 長尾伴七先生 御人々〕

はや夜寒の候になりました 益々御健康に教科書⁽¹⁾の御
編纂に今頃は御精励の御事と拝察申上ます 何と御詫
や御礼を申上てよろしいやらま

どひます程重ね々⁽²⁾の失礼深く御寛恕をねがふ次第で
ございます 暫らく帰洛致し居りました 是非御拝顔
を得てと楽しみに参りましたのに遂にお電話でおこゑ
も聞けず東京からの御泊客の御接待や御案内に明け暮
れてへとく⁽²⁾になつて熱海へ舞ひ戻りました 御熱心
に御指導を頂けますことを幸福に思つて居ります 時
折は心すまない事と思ひつ、お床の中で躰をやすめ乍
ら繰りかへし読ませて頂くこともございますがこれも
このところ自分の時間がない為でなくともお教へ頂き

たいと欲張りましてつひそんな勉強の仕方になりこれ
も申訳なくお有し遊ばしませ 今一度京都へひきかへ
したく大原あたりの紅葉も気にかゝります 若し帰洛
が叶ひます様なればお報せ申上ます 今度は御目
にかゝりたく存じます 秋冷に向ひ御躰御大事に御多祥
念じ上げます 奥様へもよしなに御伝声被下ませ 本
月廿三日午後九時三十分からNHKテレビで佐々木
茂索氏と主と対談⁽³⁾におありなれば御覧下さい
ませ 一昨日東京のNHKのテレビの放送室へ参り
ました 主人はドーランをぬつてもらひ大変若くなり
ました では後便にて又申上ます かしこ

松子

長尾伴七先生

御前に

【注】

(1) 長尾伴七氏が執筆に参加した立命館大学白川静教授編
の漢文教科書『新修高等漢文』のこと。翌年六月に完
成。

(2) 谷崎は、十月初旬頃に帰洛し、十一月初旬に熱海へ戻

つたようである。

- (3) 昭和三十年十一月二十三日夜九時十五分から、NHK
テレビで放映された佐佐木茂索との対談「谷崎潤一郎
夜話」のこと。

②昭和三十年十二月七日付け松子および谷崎潤一郎書

簡（速達）

封筒「表」

京都市右京区花園

馬代町山城高等学校内

長尾伴七先生

御直披

切手 三十五円一枚

消印 ? 30. 12. 8 後0—6

消印 太秦 30. 12. 9 前0—8

〔裏〕

✕ 師走七日

熱海市伊豆山鳴沢

一一三五

谷崎潤一郎

内

※松子と潤一郎の手紙同封

〔松子の手紙〕

師走のこゑをき、ますとさすがに朝夜のお寒さ身に沁
みます。お揃ひ御つ、がなくなりつつやいますか。先
生にも御元気に愈々教科書の御仕事も御進捗の事と存
じ上げます。ひと、きも御無理におつくり遊ばして頂
いて居りますこと、

本当に申訳もなく存じますのに何時も刻明にお書き下
さいまして刺へ字の大きさまで御心をお配り遊ばして
頂いて居りましたかと感激を新たに致しました。その
心中とは相反し思ひ出した様な気紛れの消息をどうか
御咎め下さいますな新春から度々御目に止ること、存
じますが新聞雑誌の対談座談会が¹⁾つまましてそれも
東京へ出ないでこちらへいらして頂く様に致して居り
ますので家の方はなれては居りますもの、落付かず気
疲れも多うございます。つひ御温情に甘えて勝手な時
の御たよりになり御赦し願ひます。今朝の朝日紙上で
御らん下さいましたかと存じますが、昨朝谷崎は郭沫若

氏と会見其の節頂いた詩と試みにつけた訓等を御目に懸け至急解説の御返書を給はる様とのことでございます。郭氏のことをかくの(3)に必要らしいでございます。箱根の句は私が自分だけの楽しみに歌にしてみたいと思ひます。是も亦よろしくお教へねがひます。急いで居りますので余りは後便に譲りましてどうかお寒さに向ひ御躰おいとひ遊ばしませ

かしこ

松子

長尾伴七先生

御前に

【注】

(1) 未詳。一つは、「谷崎潤一郎先生の映画談」(谷崎潤一郎・淀川長治)(昭和三十一年二月号「映画の友」)であらう。

(2) 谷崎は、六日午前九時、帝国ホテルに郭沫若を訪ねた。内山完造と「朝日新聞」論説主幹白石凡が同席。すき焼きの昼飯を挟んで、午後一時まで四時間語り合った。郭沫若は来年四月には谷崎を招待すると言った。そして、七日の「朝日新聞」朝刊(三)面「郭沫

若氏対談谷崎潤一郎氏 大いに語る三時間」および夕刊(五)面「新中国の婦人」に、谷崎と郭沫若の会話が報道された。

(3) 恐らく、計画はあつたが、実行されなかつたのであろう。これ以降、郭沫若に言及した文章としては、昭和三十三年二月号「心」に掲載された「欧陽予倩君の長詩」が最初で最後であり、それもほんの僅かの言及に過ぎない。

(4) 次の谷崎の手紙に出る郭沫若が箱根で作った詩句。

〔潤一郎の手紙〕

〔用筆・用紙など〕毛筆・巻紙

〔本文〕

生前未ダ遂ゲズ識荆ノ願ヒ

逝後空シク余ス剣ヲ掛クルノ情⁽¹⁾

(祝サントシテ?)

和平ヲ祝サンガ為メニ三タビ帽ヲ脱ス

望ムラクハ冥福ヲ将^モツテ後昆ヲ裕カニセン⁽²⁾ヲ

識荆の荆は韓荆州のことにて李白

の詩にあるとの事でした、此の詩は⁽³⁾

戦争中郭氏が日本に残して行つた

家族の面倒を見てくれた岩波書
店主の先代の墓前にさ、げたもの
です、岩波の先代と郭氏とは生前
面識がなかつたのです

なほ此の外に先日箱根で

紅葉経霜久 コレハ俳句カ歌ニ直シテ

依然恋故枝 クレトノ「デシタガウマク

出来サウモアリマセン

の句が浮かんだ、又本郷の東大で

十八年後我重来

福地瑯環トシキ浩如ネテ海

文化交流責有在

の句が浮かんだがまだ未完成だとの事

でした福地瑯環5)とは今日の語で云へ

ば図書館のやうなものですとのこと

でしたが出典がよく分りませんでし

た

訓は私が試みに施したのですが御訂

正下さい

長尾先生

谷崎潤一郎

郭氏の筆蹟をお目にかけますが

御一覽の上は恐縮ながら御返送

下さい記念に保存したいと存しま

すから

【注】

(1) 『史記』卷三十一「呉太伯世家第二」に出る「季札劍を掛く」の故事。

(2) 子孫。後世。

(3) 李白の「与韓荊州書」冒頭に出る。詩ではない。

(4) 岩波茂雄（一八八一—一九四六）のこと。岩波の中国及び中国人に対する同情については、安倍能成の『岩

波茂雄伝』に詳しい。

(5) 「福地」は仙人の住む所。「瑯環」は天帝の蔵書を収める所。共に「瑯環記」に出る。

(S31/1/1潤一郎・松子書簡↓長尾伴七『京の谷崎』)

(S31/3/6潤一郎書簡↓長尾伴七『京の谷崎』)

②昭和三十一年十月十二日付け松子書簡

〔京都市左京区下鴨泉川町五より 京都市右京区花園馬代町三 山城高等学校内 長尾伴七先生 御人々〕

庭の萩のはなもうつろひ日増に秋も深くなつて参ります
す

寒からず暑からずの好季節いよ／＼お揃ひ御健勝にお
わたりの御こと、ぞんじ上げます 私共先月末に帰洛
久々の京の情趣に浸つて居ります出立前には又興深い
御解説をお送り下さいまして寔に有難うございました
もう続けて頂けないのかと思つて居りましたゞけに猶
更嬉しう存じました どうかお暇もおありのせつそれ
も御気の向きましたをりだけでも何分の御指導給はり
たくよろしく御願ひ申し上げます 主人も御拝顔の上
にておたづね申し上げたい事も(注)ございます様申して居
ります故近々御都合のおよろしき時に御光来頂きたく

と申して居ります なたより参上申し上げ可きをい
つもお運びねがひ恐縮に存じます よく出懸けて居り
ますので前にお電話いたゞけますれば幸甚に存じます
よろづ御目もじに譲ります 秋冷に向ひ御風邪めしま
せぬ様御いとひ遊ばしませ

かしこ

松子

長尾伴七先生

御前に

【注】 欧陽予倩から贈られた詩の読みについて。『京の谷崎』P148以下参照。

(S31/12/21松子書簡↓長尾伴七『京の谷崎』)

②昭和三十三年一月三十一日付け松子書簡

〔熱海市伊豆山鳴沢一三三五より 京都市右京区花園馬代町三 山城高等学校内 長尾伴七先生 御人々〕
お揃ひめでたく初春をお迎へにて先づは祝着に存じ上

げます 本年は殊に最良の御年であられますやうに思はれます 早々に新築⁽¹⁾の御計画も着々御進捗既に地鎮祭もおすませの由御完成後の御快さも当然乍らそれまでの工事中の日々格別にお楽しみ事と拝察致されます 京都引揚げ⁽²⁾から荷物の整理それもすつかり片附きませぬうちに歳末へとくになつて年始の御客様を迎へることになり漸く元旦だけ押し居りましたが二日から臥つて了ひました それにかはるく流感で倒れあれこれするうちに早や正月の月も終らうとしてゐます

こなたの事御らんの様に御推察の上おねんごろの御いたわりの御言葉を送はり身にしみて有難く存じて居ります こなたの御無音に御関りなく再三御状頂きますのでいつの間にか一々お応えしたかの様な錯覚が起ります 様な事も多くお話申し上げた様な気さへ致します 先便の御随想⁽³⁾大変興味深く読ませて頂きました 是は私よりむしろ主人が拝見した方が良いと考へまして書齋へ持つて参りましたところ早速熱心に御筆の跡に向つて居りました このたびは私に新しい先生の御書齋の為に色紙か短冊との仰せ寔に辱う存じます 恥

しながら私共へお寄せ下さいませ御情の大きさを思うては拙うはございましてもお受け致します方がよろしいのでございませう色紙まで御心にかけて頂いて恐縮に存じますが私の好みををばせて頂きますれば嬉しうございます 御無沙汰の御詫を深く心を籠めて認めました

このところ暖かい日がつゞきますがまだく京は冷え込みも烈しい事と存じられます 御家族の皆々様くれぐれもお厭ひ遊ばして下さいませ かしこ

松子

長尾伴七先生

御前に

【注】

- (1) 長尾伴七氏はこの年、妙心寺のすぐ西、京都市右京区花園大藪町十七に新居を構えた。
- (2) 昭和三十一年十二月、谷崎潤一郎は京都下鴨の潺湲亭を売却し、熱海伊豆山の雪後庵を本宅とした。
- (3) 長尾伴七氏が書き送った四百字詰め原稿用紙二十枚ほどの随想。この年一月四日の午後四時十五分から三十

分まで、ラジオの朝日放送で放送された谷崎潤一郎・松子・今東光の「新春よもやま放談」を聞いたことがきっかけで書いたものと言ふ。

(4) 松子の色紙・短冊は実現しなかったが、後に谷崎潤一郎が硯を贈ったことは、「京の谷崎」P175以下に出る。

(S32/6/9 松子書簡↓長尾伴七「京の谷崎」)

②昭和三十二年七月二十六日付け松子書簡(速達)

〔熱海市伊豆山より 京都市右京区花園大藪町一七ノ

一一 長尾伴七先生〕

祇園祭も過ぎましたのにいまだ雨に明け暮れて居ります。いつ晴れますことやらずにやれぬ気が持たせられます。御機嫌如何でいらつしやいますか。御無音を始終心に咎められながら繰つてみると随分時が過ぎ去りました。其の間に度々御導きの書に接し交らぬお慈悲を深く感謝申上げて居ります。以前に主人から御訊ね申上げました事に就きまして偶々御発見に依りわざわざ御詳解給はり今更先生の学究的でいらつしやるのに驚き感じ入りました。主人よりも御厚札申上

げました。早速筆を執りたく心に存しながらこの節筆を持ちますと背中が痛みましてなるべく持たぬ様に致して居りまして思はぬ失礼を重ねお赦し下さいませ。お話申上げたい事も種々ございますが痛みが取れましてから又ゆるくと認めます。あまり気にかゝりませぬ、大そう乱筆ながら一筆御機嫌御うかゞひ旁々御礼迄

御身御大切に暑気に充分御気おつけ遊ばしませ

かしこ

松子

長尾伴七先生

御前に

②昭和三十二年九月十一日付け松子書簡

〔熱海市伊豆山鳴沢一二三五より 京都市右京区花園大藪町一七ノ一一 長尾伴七先生〕

爽涼の季節になりました。今年は雨の多いせいにか秋の訪れも早い様な気が致します。御家族の御皆様御健勝におすごしでいらつしやいますか御子様方も益々お元

氣に新学期をお迎への事とぞんじ上げます。いっとても御無音のお咎めもなくおやさしき御状給はり御訳詩と共にどれ程疲れきつた心の慰めになつてゐるか云ひ現せない位でございます。このところ胃腸を害し臥つて居りましたが先頃の御玉章を取り出して繰りかへし

拝誦御母君御丹精の愛らしく美しいお花のいろまで目に浮びお近ければ拝見御一緒愛でさせて頂けませうものをと隔りがうらみに存じられました。八月の廿日頃には恵美子を同道軽井沢へ参りました。其の折も李白の後期放浪時代をお送り頂きましたもの全部持つて参りまして静かな高原で読み耽りましたが実に独りで楽しむ事が出来ましてうれしうございました。

拝読致しながらこんななまで御細々お書き頂くことどんなにかお骨が折れますことかと思ひ到り感謝を深める許りでございました。御おくり頂きます都度深甚な謝意を表す可きでございますのにつひ走り書にてはと却つて御無礼の数々御看し下さいます様心から御わび申上げます。

まだく認めつけたい存じますが明朝は主人東京へ

出懸ける様申して居ります。夜も更けて参りましたから是にて筆を擱きます。虫のこゑをきながら

かしこ

長尾伴七先生

松子

御前に

②昭和三十二年十二月一日付け松子書簡(速達)

〔熱海市伊豆山鳴沢一一三五より 京都市右京区花園大藪町十七の十二 長尾伴七先生 御人々〕

紅葉した桜の葉も今一ふきで落ちつくしてしまひさうになりす、きはもうすつかり呆けました日毎にさびしい冬景色に変つてまゐります。

お揃ひお健やかにおくらしでいらつしやいますか。大分勢を得て居ります。感冒にどなた様もおかゝりになりませぬ様念じて居ります。又々御無音に日は容赦なく流れてゆきました。お咎めもなく毎々お暇をおみいで遊ばしては御心こめて細密にお書き下さいまして本當に心の底から有難くうれしく思つて居ります。私共の

為どんなにして御時間を割愛頂いて居りますかよく感
 じられるのでございます 此の秋は御新居もお訪ね出
 来ますこと、十月に入洛北白川へ滞在致し居りました
 が私着きました翌々日から感冒にて発熱気管支炎を起
 しました為半月余も床に臥し結局快癒に至りませぬう
 ちに医師の連れ(注)もありましたを幸いに熱海へ帰り引き
 続いて静養中で長々失礼申上げて了ひました あと
 〳〵家中の者が寝込んで居りまして猶更御無沙汰を重
 ね御わびの言葉もございません どうか〳〵御寛恕願
 ひ上げます 御拝顔も叶はず京に参りながら京の秋色
 を愛でることもなく心残りでなりません こんなにお
 寒くなつては本年中には参れさうにございませぬ 来
 春を待つより致し方ないことになりました
 御家族で御郷里へ御出での事がございましたらどうか
 熱海まで御み足をおのばし下さいませ 御拝眉の機会
 も得たく又こゝの眺めも楽しんで頂きたく存じます
 主人よりも呉々もよろしく申して居ります 木枯の夜
 も多く夜寒に充分御気おつけ下さいませ大層みだれか
 きにておゆるしを願ひます

長尾伴七先生

御前に

かしこ
松子

【注】 松子の姉・森田朝子の子息・森田紀三郎のこと。

②昭和三十三年一月一日付け谷崎潤一郎書簡

封筒「表」

京都市右京区花園

馬代町三山城高校内

長尾伴七様

切手 十円一枚

消印 熱海 33. 1. 4 後0—6

「裏」

寿 戊戌元旦

熱海市伊豆山鳴沢 (以下ゴム印)

電話熱海二九七〇

谷崎一郎 (署名は自筆)

〔用筆・用紙など〕毛筆・巻紙

〔本文〕

恭賀新年

戊戌元旦

谷崎潤一郎

長尾伴七先生

②昭和三十三年二月二十四日付け松子書簡

〔熱海市伊豆山鳴沢一一三五より 京都市右京区花園

大藪町一七ノ一二 長尾伴七先生 御直〕

きのふけふは陽春の暖かさでございます 久しぶりに降り出した雨は音もなくしめやかに乾ききつた地上を濡らして居ります 全くよいしめりでございます

お揃ひお元氣におくらしでいらつしやいますか今年も亦卒業生をお送り出されます日も近づき何かと御忙がしくいらつしやいます事と存じ上げます 先頃から再度にわたり御訳をおおくり頂き恐れ入りました いつもながら御真情籠る御導きに一字一句もおろそかに見過しては勿躰なくと暇の見つけられませぬ日は深更に

及びますとも拝誦させて頂いて居ります 何と申しま

しても若い人の様には参りませず記憶力もみに減退

寔に牛の歩みの遅々と歯がゆい許りでございますが欲

深さは衰へませぬ故か益々興味は深く尽くるところを

知りませぬ 開きます度に知らない言葉が随处に出て

来ますのには目を見瞠ること屢々にて同時に何と云ふ

語彙の多い国かと今更驚嘆致して居ります 中国詩人

全集も求めてみましたが到底先生の御註釈のやうに神

経の届いたものには及ぶ可くもございませぬそれに主

人が読み下し方が氣にいらないと申します どうか此

の上ともお見限りなく御つゞけ下さいますやう偏にお

願ひ申上げます 勿論お暇がおもちになれて御氣のお

向きの時で結構でございますから 一雨毎に樹々が芽

ぐんで参りましたはなの咲く日も近づいて参ります

花が綻びはじめましたら好例により京都へ暫く滞在致

します 今年こそは御新居も拝見かたく御皆さまに

御目に懸りに参上致します心組でございます 樂しみに

春の訪れを待つて居ります

どうか御健勝にお出で下さいますやう祈つて居ります

御奥様はじめ御家族の皆様へよろしく御鳳声ねがひ上げます
かしこ

松子

長尾伴七先生

御前に

【注】 岩波書店の『中国詩人選集』のこと。潤一郎が《読み下し方が、気に入らない》と言ったのは、長尾伴七氏によれば、口語的に砕いて平易にし過ぎていているため、元の詩の味わいが失われる弊を言ったもの。

(S33/6/24 松子書簡↓長尾伴七『京の谷崎』)

(S33/7/6 松子書簡↓長尾伴七『京の谷崎』)

◎昭和三十三年八月三十一日付け松子書簡(富士山の見える絵葉書)

〔熱海市伊豆山鳴沢一―三五より 京都市右京区花園大藪町一七ノ一二 長尾伴七先生〕

漸く爽涼を覚えるやうになりました お揃ひ御健やかにて何よりお喜び申上げます 李白詩いつとても詳細

に御根気よく御教示下さいまして感銘致して居ります 先日皆で富士五湖をめぐりました(註) 湖水の好きな私には殊の外快うございました 今秋こそは御拝顔を得たく今より楽しみに入浴を待ちます 御無音御わびかたへ

【注】 潤一郎の娘・恵美子さんによれば、潤一郎・松子・重子・恵美子ら家族全員で行き、日帰りで全部の湖を廻ったと言う。しかし、車が外車で、潤一郎は腰が痛くなったので、後に女中キミの夫・藤巻の運転で行った時には、山中湖のホテルに一泊したと言う。

◎昭和三十三年九月十五日付け松子書簡(富士山の見える絵葉書)

〔熱海市伊豆山鳴沢より 京都市右京区花園大藪町一七ノ一二 長尾伴七様〕

度々ぶりかへすお暑さに閉口致しましたが今朝は漸く涼風が立ちました お健やかにおくらしの事と存じ上げます 御大切の御時間を御割愛頂いて何時も有難く思つて居ります 真夏の頃からお見立て致して居りま

した御シヤツをつひ荷作りを怠つて居りましたがお召しになれなくなつてはと本日発送申上げました 御笑納被下ませ

御皆様氣候の変わり目に呉々も御自愛專一を祈ります

〔S34 / 5 / 16 松子書簡↓長尾伴七 〔京の谷崎〕〕

〔S34 / 5 / 23 松子書簡↓長尾伴七 〔京の谷崎〕〕

〔S34 / 7 / 26 松子書簡↓長尾伴七 〔京の谷崎〕〕

⑳昭和三十四年八月八日付け松子書簡

〔熱海市伊豆山鳴沢一二三五より 京都市右京区花園

大藪町一七ノ一二 長尾伴七先生 御侍史〕

颯風が近づき今夜は雨が降りつつ居ります御旅行のお疲れもなく御機嫌よくいらつしやいますか 御家族の皆様猛暑にお負けにならずお元氣にお過しでございませうか 帝釈峽¹⁾からの絵葉書嬉しうございました

それにこのところ次々と李白に親しむことが出来まして大変楽しうございます 昼間に読ませて頂けるやうになりました と申しますのは主人が牽引の療法²⁾を

致します為二十分間三回ベッドに臥ります 其の間傍について居りますので必ず見せて頂くことに決めて居ります

明月上人のことは主人が秘書の人に調べさせました³⁾

お目にかかるやう申しましたから同封致します 何卒

宜敷お願ひ申上げます 明日は早や立秋でございます

が暑気はまだく酷しいこと、存じます 御健康に御

気おつけ下さいませ

御母上奥様へくれぐれよろしく御鳳声願ひ上げます

谷崎よりも宜敷申出ました

かしこ

松子

長尾伴七先生

御座右

【注】

(1) 広島県北東部の比婆道後帝釈国定公園内にある。

(2) 昭和三十三年十一月二十八日以後、谷崎は右手に疼痛と冷感を覚え、執筆が不自由になっていた。その治療のために、一時期、試みられた。『瘋癲老人日記』に

も、登場する。

御前に

(3) この頃、谷崎は十八世紀後半に松山で活躍した僧・明月上人の巻物を安倍能成から貰った。『京の谷崎』P186以下参照。

(S34/9/1松子書簡↓長尾伴七『京の谷崎』)

③昭和三十四年八月十二日付け松子書簡

〔熱海市伊豆山鳴沢一一三五より 京都市右京区花園

大藪町一七ノ一二 長尾伴七先生 御硯北〕

〔葉書〕(松子筆)
〔表〕

時ならぬ涼しさにゆかたに羽織るものを取り出す始末

京都市右京区

でございます 十日附御状有難く拝誦妙心寺の盃蘭盆

花園大藪町一七ノ一二

の様子が手にとるやうに分りますそれにしても随分近

長尾伴七様

代的になつたものでございます 法燈のゆらぐ幽かな

谷崎潤一郎(以下印刷)

感じはどこにも見当らないでございます

静岡県熱海市伊豆山

明月上人の伝同封致しました筈が失念お宥し遊ばしま

鳴沢一一三五番地

せ 迂闊なことでございます いつにてもお暇を得

電話熱海二九七〇番

られました節に解説をお願い申上げます 残暑お厭ひ

切手 五円1枚

の程ねんじ居ります

消印 熱海 35. 1. 16 前8-12

かしこ

〔用筆・用紙など〕毛筆

松子

〔裏〕

長尾伴七先生

謹賀新年(印刷)

昭和卅五年庚子元旦(印刷)

はやふくと御賀状を有難うぞんじました 当方旧臘より取り込み事にて洵に御挨拶おくれはせとなり御容赦願ひます 初春に当り日頃の御無音を深くおわび申上げ併せて皆様の御健康を祈り上げます

谷崎潤一郎(印刷)

松子(印刷)

(S35/2/4潤一郎(代筆)書簡↓長尾伴七「京の谷

崎」)

(S35/2/19潤一郎(代筆)書簡↓長尾伴七「京の谷崎」)

③昭和三十五年二月二十三日付け谷崎潤一郎(代筆)

書簡

封筒「表」

京都市右京区花園大薮町

一七ノ一二

長尾伴七先生

切手 十円一枚

消印 熱海 35. 2. 24 後0-6

「裏」

× 二月二十三日

熱海市伊豆山鳴沢(以下ゴム印)

電話熱海二九七〇

谷崎潤一郎 代筆(代筆者自筆)

「用筆・用紙など」ペン書・便箋2枚

「本文」

お忙しいところ、早速に御返事を有難うございました。さて、お手紙中の「水飯」^注につきまして、ちよつと考へましたことを申し上げます、

日本でスイハンといふ、昔からの食べ物「お粥」ではなくて、御飯に冷水をかけたものであることは先刻御承知でいらしゃいませう、支那でも、夏の暑い日などには、普通の御飯の上から、冷水をかけて、食べてをりました。

「水飯」が、日本でのスイハンと違つて、私の食べましたあた、かなシーファンと同じものだといえます

と、支那の人が食べてゐた冷水かけの御飯は、何と呼んでゐますのでせうか、

右ちよつとおたづね申し上げます、

それから、周作人氏の詩の「鐘魚」の魚は、木魚のこととも、或は魚板ではないかとも考へられますが如何でございますか これも併せて御意見お聞かせ下さいませ」(以上1枚目)
まづは右おたづねまで

二月廿三日

草々

谷崎潤一郎(ゴム印)代筆

長尾伴七先生

【注】『京の谷崎』P199以下参照。谷崎が周作人から贈られた詩の解説を二月四日付けで依頼し、二月十六日付けで長尾伴七氏が返事を出したが、詩の中にあつた「粥飯」という言葉をめぐつて、二月十九日付けの手紙の中で、谷崎はかつて中国の江蘇・浙江あたりで「シーフアン」という粥を食べたので、「粥飯」も「粥と飯」ではなく、「粥の飯」ではないかと疑問を呈した。

それに対して、長尾伴七氏が返事を書いた中で「水飯」に言及し、潤一郎のこの手紙となつた。

②昭和三十五年三月二十九日付け谷崎潤一郎(代筆)書簡

※この書簡は、『京の谷崎』にも採録されているが、途中九行の脱落があるので、ここにあらためて全文を掲載する。

封筒「表」

京都市右京区花園大薮町

一七ノ一二

長尾伴七様

切手 十円1枚

消印 熱海 35. 3. 30 前8—12

「裏」

メ 三月廿九日

熱海市伊豆山鳴沢(以下ゴム印)

電話熱海二九七〇

谷崎潤一郎 代筆(代筆者自筆)

〔用筆・用紙など〕ペン書・便箋3枚

〔本文〕

先般は御手紙まことに有難う存じました。今月十日付の御手紙は、拝受いたしました時まだ読書を禁じられてをりましたので、つい二、三日前拝見いたしました、その為お返事がおくれましてまことに失礼いたしました。私はだん／＼快方に向つてをりまして、昨今では家の中を歩いたり、寝たり起きたりしてをります、

シーファンのことをいろ／＼詳しくお教へ下さいまして有難う存じました。粟の粥は日本でも貧しい農村等で食べてゐるらしいのですが、私は粟が好きなので、支那流のおいしい粟粥を一度食べてみたいものと思つてをります、しかし、なか／＼さう云ふものを食べさせるところはないと思ひます、蓮の実の粥は、北京では常時食べられる由でございしますが、私は実際にはまだ食べてみたことがございませぬ。」(以上1枚目)

それからあの寂巖の軸のこと、掛けておきますと来客

に尋ねられて返事が出来なかつたりして困つてをります、

催促かましく申し上げるやうにお思ひ下さいますは恐縮でございますが、あれは震ヲ出ヅレハ寰宇清シとお訓みになりましたのでせうか、どう云ふ意味なのでございませうか

一番上の字はたしかに「出」なのでせうか、「震」といふのが、易から出てゐるらしいとは私も同感なのでございしますが、ほかのことは何も分りませぬ、急ぐことではございませぬが、何とぞ御教示をと、お待ち申し上げます、

家内宛にもたび／＼御懇切なお手紙いたゞいてをりまして有難う存じます、いづれ改めて手紙差出す筈でございしますが、毎日雑事に紛れて延引致してをります何卒失礼お許し下さいますやう、

不順の折柄御いとひの程祈りをります。」(以上2枚目)

敬具

三月廿九日

谷崎潤一郎(ゴム印)代筆

長尾伴七先生

【注】

(1) 昭和三十五年三月一日、谷崎はひどい頭痛に襲われ、全身に激しい痙攣が起こって意識を失った。医師の手当を受けた結果、意識を取り戻し、血圧が上がったための一時的症状と分かった。しかし、暫くは静養する必要が有り、読書を禁じられていた。

(2) 谷崎潤一郎が所蔵していた僧・寂庵（一七〇二〜七一）の軸で、昭和三十五年二月四日付けの手紙で、谷崎が解読を依頼していた。文字は「出震寰宇清」と読めるが、一字目は「歩」または「制」という説もある。「京の谷崎」P204参照。

⑤昭和三十五年四月四日付け谷崎潤一郎（代筆）書簡

（葉書）

【表】

京都市右京区花園

大藪町一七ノ一二

長尾伴七先生

四月四日

谷崎潤一郎（以下印刷） 代筆（代筆者自筆）

静岡県熱海市伊豆山

鳴沢 一三五番地

電話熱海二九七〇番

切手 五円一枚

消印 熱海 3.5. 4. 5 前8―12

【用筆・用紙など】ペン書

【裏】

熱海は桜が散り初めてをります

本日、別便にて粗品【注】お送りいたしました

ました 何とぞお机にてお使い

下さいますやう、

右一筆御案内まで

草々

【注】書留小包で、桐箱入りの黄楊木の墨台と、朱墨・唐

墨各一点が送られた。

⑥昭和三十五年五月二日付け谷崎潤一郎（代筆）書簡

(葉書)

〔表〕

京都市右京区花園

大藪町一七ノ一二

長尾伴七先生

五月二日

谷崎潤一郎(以下印刷)

代筆(代筆者自筆)

静岡県熱海市伊豆山

鳴沢一三三五番地

電話熱海二九七〇番

切手 五円一枚

消印 熱海 35.5.2 後6—12

〔用筆・用紙など〕ペン書

〔裏〕

新緑美しい候となりました、さて先日お送りいたしました唐墨、こちらであれと同じものを使ひましたところ、砂利が入つてをりましたので、もしやそちらでも

御使ひになつて御不快なことはなかつたかと存じ

ちよつとおたづね申し上げます まだ御使用に

なつてをりませんでしたら、手持ちの他の唐墨

と、取りかへさせていたゞきます故何卒御送り

返し下さいますやう、もしもお使いになつてを

りましたら、御使用に支障はございませんでしたか

どうかおしらせ下さいますやうお願いいたします

③昭和三十五年五月二日付け松子書簡

(熱海市伊豆山鳴沢一三三五より 京都市右京区花園

大藪町一七ノ一二 長尾伴七先生)

都をどりの御観覧券を三枚お送り申し上げます 五月十

八日迄でございます どうか御母君や奥様にいらして

頂いて下さいませ 年々変つた趣向もございませんが

一応は華やかで私は幼い頃からあの情緒は好きで思ふ

さへ懐かしく春愁を感じます

この週のカウン(注)に披露宴の写真がいろ／＼出てをり

ます お送り申上げればよろしいのでございますが若

しお近所にてお手にいるやうなら御らん遊ばして下さい

ませ

主人から度々早々にお慶びを申上げるやう性かれながらあまりにも事多く延々になりましたことを深く御わび申上げます 御出京のこともおありでいらつしやいましたら是非々々お立ち寄り下さいませ

かしこ

松子

長尾伴七先生

御前に

【注】 五月十日号「週刊公論」に四月二十二日に行われた谷崎恵美子・観世栄夫結婚披露宴の写真が多数掲載されている。

(S35/5/4 松子書簡↓長尾伴七「京の谷崎」)

◎昭和三十五年五月十三日付け谷崎潤一郎(代筆)書簡(葉書)

【表】

京都市右京区花園
大藪町一七ノ一二

長尾伴七先生

五月十三日

谷崎潤一郎(以下印刷) 代(代筆者自筆)

静岡県熱海市伊豆山

鳴沢一三三五番地

電話熱海二九七〇番

切手 五円一枚

消印 熱海 35. 5. 14 後0-6

【用筆・用紙など】ペン書

【裏】

熱海山、みかんの花が咲き初めました

唐墨御返送下さいまして恐れ入りました

代りの品を昨日書留にてお送りいたしました

ました、今度のものは大丈夫と存じます

が、まだ、ほかの唐墨もございますから

御使ひになつて砂利が入つてをりましたら

どうぞ御遠慮なくお申し越し下さいませ

まづは右御案内まで

草々

(S36 / 1 / 1 潤一郎・松子書簡↓長尾伴七「京の谷崎」)

(S38 / 5 / 8 松子書簡↓長尾伴七「京の谷崎」)

(S39 / 4 / 27 松子書簡↓長尾伴七「京の谷崎」)

㊥昭和三十九年七月吉日付け転居通知

※全集収録のものと同文であるため、省略